
フレンド

七瀬 夏葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレンド

【Nコード】

N1271P

【作者名】

七瀬 夏葵

【あらすじ】

数年ぶりに帰郷したカナこと行平^{ゆきひら} 加奈子^{かなこ}が降り立った地元の空港に迎えに来たのは、懐かしい家族ではなく見知らぬ青年だった！このカッコいい男性の正体は！？友達だけど好きなんだよ？年下男子とのじれじれ片道ラブストーリー！。カナの恋の行方はいかに！？

プロローグ

好きな人がいる。

それはもう、どうしようもない恋心。

不毛な片思い。

叶わないって分かってても、どうしようもない。

気持ちは、止められない。

きっかけなんて覚えてない。

気が付いたらもう、好きになってた。

そんな、恋。

ねえ、君は分かってる？

触れられる度、ドキドキする事。

言葉ひとつで、上がったり下がったり。

気分はまるでジェットコースター。

気付かないフリ？それともワザと？

その腕が、声が、私を絡め取って、動けなくする。

どうして？

君の向ける好きは、恋じゃないのに。

どうして私を、そばに置きたがるの？

分からないよ。

楽になりたくて、離れてみても、無駄な抵抗だった。

「友達だろ？」

そう言って笑った。

ずるい、笑顔。

トモダチ

今日も私の前に立ちはだかる、大きな、壁。

この恋は叶わない。

知っているのに、今日もこの手は、強引に引かれてしまう。
友達という名の、片恋の相手に……。

第一話「ドッキリ!? 年下男子がお出迎え!!」の巻

『……ごめん、カナさんの事は、友達としか見れないから倒れそうだった。』

何コレ!? なんでこうなるの!?

耳を疑った。

それは、確かに聞こえた、現実。

「……そ、そうだよ。うん、ごめん、変な事言って」

クラクラする頭で、辛うじてそう言った。

『いや、その、俺の方こそ、ごめん……』

携帯電話越しに聞こえる彼の声が、遠い。

「き、気にしないで! いいの! ホント、気にしないでいいから!」

目の前は真っ暗だった。どうしていいかわからない。

こうなるなんて、思ってもみなかったから。

事の起こりは、三か月前。

「カナさん! 久しぶり!」

5年ぶりに地元空港に降り立った私を迎えたのは、懐かしい家族・

・・・ではなく、まったく見知らぬ青年だった。
ガツシリとした身体。男らしい肩。つるりとした綺麗な肌。つぶらな瞳。艶やかな短い黒髪。
はつきり言ってカッコいい。

・・・この人、誰??

?マークがいつぱい飛んでいる私に、彼はあからさまに不満そうな顔で言った。

「あ、今、こいつダレ、とか思ったデシヨ!凶星?」

「え、あ、うん・・・」

戸惑う私に、彼はふーっと大きな溜息を吐いた。

「オ・レだ・よ!ジュン!!佐藤 純平!!覚えてない?」

言われて私は記憶を手繰る。

佐藤佐藤佐藤・・・・・・・・・・。

「て、ええっ!!まさか君、ジュンちゃん!?」

「そうだよ。やっと思いました?」

ジュンちゃんこと佐藤 純平。

彼は私こと行平 加奈子の弟、行平 正志の友達だった。

小学校低学年の頃からよく家に遊びに来ていて、いたずらをしては私を困らせていた悪ガキだ。

「うそっ！？ホントにあの鼻たれ小僧なワケ！？」

「鼻たれって……。。。。カナさん酷いな。俺、そんな印象だったワケ？」

彼はげんなりとした顔で私を見た。

「ごめん、だつてアンタ、昔はホントにただの悪ガキだつたじゃん」

私の記憶にある彼。

それは、お菓子を食べた油ぎつた手で私の大事な漫画を汚したり、勝手に大事なチョコを盗み食いたり、冷蔵庫にしまつてあつた私の好物のソーセージをぜーんぶ食べちゃつたり、大事にしていたコレクシヨンのシールを遠慮なくべたべたと壁にはつてしまつたりと、本つ当にロクな事をしていない！

しかも、いくら怒つても次の日にはまたやるので、子供の時分には相当に手を焼いていた。

「あはは。まあね。あの頃はガキだつたんだし。しょうがないだろ。今はホラ、大人だから」

苦笑いを浮かべ、どうだ！とばかりに胸を張る彼に、私は思わずぶつと吹き出していた。

「何よソレ。まったく、見た目は変わつても、中身は子供の頃と変わつてないんじゃないのお？」

「あ、笑つたな。よし！男らしいトコ見せてやるよ」

そう言つて彼は、私の大きなトランクと大量のおみやげバッグをひ

よいひよいとあつという間にかつさらった。

「車はあっち。着いて来て」

思わぬ行動にビックリしながら、私は彼の後をついて空港の駐車場へと向かった。

第一話「ドツキリ!? 年下男子がお出迎え!! の巻」(後書き)

<予告>

「カナさん、同人でも売れてればOKだと思わない?」

「え? まあ、そうだろうけど・・・。何? どういうこと?」

「オタつてことさ」

「ジュンちゃん、いろんな意味でアウトだよ・・・」

次回【フレンド】第二話「年下男子はゲームがお好き? の巻」

お楽しみに

第二話「年下男子はゲームが好き?の巻」

ジウンちゃんはそのまま私の荷物を抱えて車まで案内してくれた。

「ささ、カナさん乗って」

手際良く荷物を後部座席へと積み込み、助手席のドアを開けてエスコートされる。

「あ、ありがとう」

私が助手席に座ったのを確認してからサッとドアを閉め、運転席へと回り込む。

その手際の良さに、思わず感嘆の声を漏らした。

「はあ〜、変われば変わるもんだねえ」

「はは。やっと分かってくれた?俺だっていつまでもガキじゃないんだからね〜」

ほれ見た事か、と言わんばかりに得意気な彼に、私は大袈裟に感心しながら言った。

「うん。ビックリした。いつの間にか大人になってたんだねえ。おねえさんは嬉しいよ。君がちゃんと成長してくれてて」

うんうんと頷く私に、彼はシートベルトを締めながら苦笑を浮かべ、こちらを見やった。

「はは。ま、とりあえず、車動かすからベルト締めてくれる?」

「あ、うん。ちょっと待ってね」

私がシートベルトを締めると間もなく車が発進した。

「カナさん、音楽かけていい?」

「ん? いいよー」

短く答えると、彼は器用に片手でカーオーディオを操作し、車内に女性ボーカルの歌う軽快な曲が流れ始めた。

「あ、この曲いいね。誰の?」

「ああ、コレ? 知ってるかなー。同人ゲームで使われてる曲なんだけどさ」

そう言っただけで教えてくれたゲーム名と女性ボーカルの名前は、私が聞いた事も無いものだった。

「へー、知らないなあ。流行りなの?」

「そうだねー、けっこう流行ってるんじゃないかなー。けっこういいろんなバンドがカバー曲出してて、コンサートやイベントもあちこちでやってるし」

「え! 同人ゲームなのに!? 凄いな!! そんなに人気あるんだ!？」

同人ゲームという事は、つまりメジャーな企業から出されているプ

口の作品では無く、個人が趣味で造って販売している物の筈だ。それがカバー曲が出ていて、コンサートやイベントが色々あるという事は、それだけその作品の人气が高いという事なのだろう。

「うん。そりやもう、物凄い人気みたいだよー。俺も友達がCDかけてて、いいなって思ったのがきっかけなんだけどさ、今じゃゲームもハマッてんだ」

そう語る彼は、いかにも楽しそうで、思わず興味がそそられた。

「へー。どんなゲームなの？」

「シューティング系のパソゲーだよ」

シューティングと聞き、思わず苦い顔になった。せめてRPGとかアドベンチャーなら私もやれるんだけど……。

「そっかー。それは私じゃ無理かもね。シューティングだけは苦手です」

残念がる私に、彼は何でも無い事のように笑った。

「一回やってみれば？ゆきっちゃんのパソコンにインストールしてあるからさ」

“ゆきっちゃん”。

久しぶりに聞く弟の愛称に、私は懐かしさで目を細めた。

「その呼び方、変わってないね。今でもあの子と仲良いの？」

彼はまっすぐ前を見ながら笑顔で答えた。

「うん。冬なんかほとんど毎日カラオケ一緒に行ったりしてたよー」

「ま、毎日!? あんたら元気ね〜」

毎日カラオケ行く体力があるとは。流石に若いなあと思ってしまう。

「あはは。カナさん、発言がオバちゃんくさいよ〜」

可笑しそうに笑われてしまい、ちよつとだけ落ち込む。

うーん、年齢の差を感じるなあ。

「悪かったわね〜。こちとらもう三十路なのよ。そういえば君、随分会って無かったけど、今年幾つなんだっけ?」

私の問いに、彼はサラリと答えた。

「21だよ」

「に、にじゅういち〜!? 10も下!?!」

驚く私に、彼はハンドルを握ったまま苦笑を浮かべた。

「カナさん、本気で俺の歳忘れてたの? ま、10年以上会ってないから仕方ないちゃー仕方ないけど」

昔はあんなにしょっちゅう顔合せてたのに、と言われ、思わず慌てた。

「ごめんごめん。あ、そういえば今日、何であの子じゃなくて君が
迎えに来たの？」

バツの悪さから話題を変えると、彼は何でもないようにサラリと答
えてくれた。

「ああ。ゆきつちゃんが集会入っちゃったって言うからさ、急遽俺
が代理だね」

“集会”というのは農業組合の集まりの事だ。

弟の正志は、数年前に父の後を継いで農業経営者となっているので、
組合の寄り合いなどには弟が自分で参加しているのだと聞いた事が
あった。

「ふーん、そっかー。それならそうと教えておいてくれたらいいの
に。あたし、何も聞いてなかったよー？」

今日向こうを出る前に連絡した時も、別段変わりなく、来られない
という話はしていなかった。

「そりゃそうだよ。ビックリさせようと思って秘密にしてたんだも
ん。予想以上にビックリしてくれてドッキリ大成功って感じ？」

悪戯っぽく微笑む彼に、私は思わずドキンとした。
そんなふうには笑うの、反則だ。

「ドッキリはしたね、うん」

ごまかすように目を逸らし、窓の外を見やった。

「やったね！」などと無邪気に喜ぶ彼の声を聞きながら、私は懐か

しい故郷の、流れる景色を見つめるのだった。

第二話「年下男子はゲームが好き?の巻」(後書き)

<次回予告>

「やゝ、悪ガキがここまで変わるとはね」

「俺よりすご〜く変わった人がいるけどね」

「そ、それって・・・」

(あたしのこと?ドキドキ)

次回【フレンド】

第三話「年下男子にただいま!?の巻」

お楽しみに

第三話「年下男子にただいま!?!の巻」

それから車は順調に進み、やがて懐かしい我が家へと辿り着いた。

「到着〜」

車を停めたジユンちゃんに、私はにっこり微笑んだ。

「ありがとうジユンちゃん。運転お疲れ様でした」

「いえいえ。カナさんも長旅で疲れたデシヨ」

ドキン!

返された笑顔に思わず胸が高鳴る。

や、だからその笑顔、ヤバイって!

焦りながら車を降り、荷物を取り出そうと後部座席のドアに手をかけた時だった。

「あ、カナさんは先行って。荷物は俺が運ぶから」

「え!?!や、そんなわけには……」

遠慮する私に、彼は眉をしかめて言った。

「いいってば。長旅で疲れてンでしょ。俺が運ぶからカナさんは行きなつての」

「あ……うん……」

思わず頷き、素直に玄関へと向かって歩き出した。

何て言うか、ホント、変わったなあ、ジュンちゃん。

昔は本当に悪ガキって印象しか無かったのに、すっかり男の顔するようになっちゃって。

などと思いながら歩いていると、大荷物を難なく抱えたジュンちゃんが追い付いて来た。

「カナさん、ごめん、玄関だけ開けてくれる？」

私はすぐに玄関まで走り、昔ながらの引き戸をガラガラと開けた。

「ありがと〜。お〜いゆきつちゃん、カナさん連れて来たよ〜」

ドサリと荷物を玄関に置き、ジュンちゃんは叫んだ。

ドタドタと音がして、二階から弟が……

「……て、えええええー！！！！？？まま、正志！！！！？」

思わず叫んだ。だって、その姿は……。

「お疲れ〜。ありがとね〜ジュンちゃん」

にこにこ笑顔を向けられ、ジュンちゃんは爽やかに笑顔を返している。

「おう。あ、コレ、頼まれてたやつ」

空港で買ったらしいお菓子の包みを手渡しているのを見ながら、私

は唾然として口を開く。

「ちよっ……アンタ、ホントに正志なの!!!??」

目の前の？正志らしい男に問いかけると、彼は苦笑いを浮かべて答えた。

「カナさん、酷いなあ。可愛い弟にその言い草はないだろ」

その声もゆつたりした口調も、たしかに弟正志のものだけど……。

「いや、だってアンタ、いくら何でも変わりすぎでしょー!!!」

目の前には、相撲でもやってるの？と問いかけたくなるほどの巨漢男がいる。

五年前、最後に見た弟の正志は、少なくともこんな姿ではなかった。ちよつとぼつちやりではあるが、それでも普通の範囲だったハズなのだ。それが……。

「その体型!!! 一体どーしちゃったのよー!!!??」

全力で問いかけた私に、正志は相変わらず苦笑いを浮かべて答えた。

「ああ、まあ、夜中にインスタントラーメン食べたりしてたらこうなった」

「はあっ!!!???何よソレー!!!??」

話を聞くと、どうやらこうなったのは正式に家督を継いでからの事らしい。

私がない間、食事もほとんどインスタントか冷凍食品が多く、栄養バランスが著しく崩れた食生活となっていたようだ。

「はあ〜……………まったく……………」

思わず頭を抱えた。よもやここまで我が家の食生活がヤバイ事になっていようとは。

これは本当に、帰って来て正解だったのかもしれない。

「あ、そういえばさ、まだ言ってなかったね」

思わず溜め息を吐いていた私を見て、ジュンちゃんが言った。

「カナさん、おかえり!!」

向けられた笑顔が眩しくて、私は小さく呟くように返した。

「……………ただいま」

こうして私は、五年ぶりに我が家へと戻って来た。

数年ぶりに再会した懐かしい家族。そして、ジュンちゃん。

この再会が、後々大きな嵐を巻き起こす事になるなど、この時はまだ、知る由も無かった。

第三話「年下男子にただいま!?!の巻」(後書き)

<次回予告>

「ねえジュンちゃん、デートの定義って何だと思う?」

「一緒に出かける事でしょ。男同士でもデート!」

「ダメだこりゃ……」

次回【フレンド】

第四話「ドキドキ!年下男子と初デート!?!の巻」

お楽しみに

第四話「ドキドキ！年下男子と初デート！？の巻」

懐かしの我が家に帰って来て数週間。

荷ほどもほとんど終わった私は、食生活が貧しいウチの男性陣の為に今日も包丁片手に食事の支度にいそしんでいた。

「フンフンフーンと」

鼻歌を歌いながら味噌汁の鍋に味噌をといていた時の事である。

P i r r i r i r i r i ! ! ! ! ! ! ! ! !

家の電話の呼び出し音がけたたましく鳴り始めた。

「はいは〜い。今出ますよ〜と」

一旦手を止め、パタパタと茶の間に置かれた電話の子機を取りに走った。

「はい、もしもし」

『あ、カナさん？やっほー。俺だけど〜』

「俺俺詐欺なら間に合ってます〜す」

タンパクに言い放つと、電話の向こう側で『ええ〜っ！？』と驚きの声が響いた。

「あはは！ジョーダンよジョーダン ジュンちゃんでしょ、分かつ

てるっ〜」

『カナさ〜ん、カンベンしてよ〜』

「ごめんごめん。で、なあに?」

笑いながら尋ねると、ジュンちゃんの明るい声が返って来た。

『カナさんっ、デートしよ!~!』

「はあっ!?!?で、デートおおー!?!?!?」

思わず叫んだ私に、ジュンちゃんは笑いながら言った。

『そ。デート。ゆきっちゃんは飲み会で遊べないって言うからさ、カナさん一緒に出かけないかな〜っと思って』

その言葉に、私はホツと息を漏らした。

「なあんだ。そ〜ゆ〜事ね。いいよ〜。今、ご飯支度してるけど、これ終わったら出られるからさ〜」

「じゃあ決まりね!7時にそっち迎えに行くから、それまでに支度しといて〜」

私は短く了解の返事を返して電話を切り台所へ戻った。

それにしても、デートなんて……。

ジュンちゃんに他意は無いんだろうけど、一瞬めちゃくちゃドキドキしちゃったよ。

まったく……………。
などと思いながら夕食の支度を済ませ、いそいそと出かける支度にかかった。

「えーと、トップスはこれで、スカートはこれ、アウターはこれ。下着は……………」

どれにしようと思った時、何となく可愛いやつに目が行ってしまっ
た。

「やつ、別に見せる訳じゃないけど！トータルコーディネートってやつよ！うん！！」

言い聞かせるように言って、ちゃっかり可愛い系の下着を選んだ。
上下お揃いの淡いピンクの下着にキャミソール。インナーにはシン
プルな白のブラウス、アウターには細いヒモを胸元でリボン結びに
するVネックの黒セーターを着る事にした。

下は、黒が基調の、ゴシックまではいかない控え目なフェミニン系
のスカートに黒のストッキング。

それから入念な基礎化粧品で肌のお手入れもして、控え目な化粧をほ
どこした後、愛用の香水【アクア・デ・ジオ】のミニボトルを開け
てちょこんと掌にのせて耳たぶへつける。

仕上げに首元にお気に入りのプチダイヤのネックレスをつけて……………。

「ん、完璧」

今持っている服で出来る最大限のおしゃれコーディネートだ。
でもコレ、まるでデート服……………。

「や、違っし！……！！！」

自分で考えて自分でつつこんだ。

「もう……！ジュンちゃんがデートとか言うから……」

すっかりデートを意識してしまった自分にちょっと自己嫌悪。

あんな年下の冗談を意識するとか、有り得ないし……！！！！

などと半ば言い聞かせるように思っていると、遠くから特徴的なマフラー音が聞こえ始めた。あの音は多分……。

案の定、音は我が家の前で停まり、やがてガラガラと玄関の引き戸が開かれる音が響いた。

「ちわ……！！姫、お迎えにあがりましたよ……」

その声に、思わず頬が熱を持つ。

「……は、は……い！今行きます……す……！！」

ごまかすようにバッグを持って部屋の外へ飛び出した。バタバタと階段を降り、玄関へ向かう。

「お、カナさん可愛いじゃん！」

（か、可愛い！？）

唐突にかけられた言葉に、思わず頬の熱が増した。

このシチュエーションでそう言われるとは……。

「ん？どしたの？何か忘れ物？」

思わず固まった私に、キョトンとした顔で尋ねて来たジュンちゃんを見て、慌てて口を開いた。

「や、大丈夫！行こっか！」

下駄箱から黒のブーツを取り出し、それを履いて外に出る。玄関の前には横付けされた黒い軽自動車があり、ジュンちゃんが助手席のドアを開けてくれた。

「どうぞ、カナさん」

「あ、ありがと……」

ちよつと躊躇いながら助手席に乗り込んだ。

途端に、マリン系のいい香りが鼻孔をくすぐる。

ドアを閉め、シートベルトを締めている私の横にジュンちゃんが乗り込んだ。

「ジュンちゃんの車って、いつもいい匂いするよね」

シートベルトを締めながら、ジュンちゃんは笑って答えた。

「カナさんコレ好き？【マリンシャワー】だよ」

目の前に置かれた缶に入った芳香剤を指して嬉しそうに言う。

（や、だからその笑顔ヤバイってば！）

いちいち思うのも何だけど、ジュンちゃんに向けられる笑顔は反則

的にヤバイ。

見てるだけで思わずドキドキしちゃうようなステキ笑顔なのだ。別に他意があるわけじゃないんだろうけど……。

「んじゃ、行きますか」

ステキ笑顔を浮かべて車を発進させるジュンちゃんの横で、私はひたすら窓の外を眺めていた。紅い頬をごまかすように……。

第四話「ドキドキ！年下男子と初デート！？の巻」（後書き）

<次回予告>

「ねえジュンちゃん、恋愛って難しいよねえ」

「え！？何その前フリ！？」

「たまにはシリアスにいこうかと」

「カナさん、キャラに合っていない」

「生意気言うのはこの口か？ん？ん？」

「ほへんなは〜い（ごめんなさ〜い）」「」

次回【フレンド】

第五話「愛って何さ？年下男子は無関心！？の巻」

お楽しみに

第五話「愛って何さ？年下男子は無関心！？の巻」

ジュンちゃんと二人きりで出かけるのは初めての事だ。いつもは正志と三人で遊びに行ってたから。

狭い車内に二人きり……。

緊張をごまかすように、私は明るく話しかけた。

「ねえジュンちゃん、あのさー、ジュンちゃんて彼女いるのー？」

言ってからしまったと思った。

何いきなり超プライベートな質問してんの、私ってばー！！

「んー、今はいないよー。カナさんは？彼氏いるの？」

ああっ、地雷踏んだ！！

聞かれちゃったよ、聞かれたくないトコー！！

「んー……、いる事はいるんだケド……」

もごもごと言葉を濁す。

ああ、言いにくい……。

「何カナさん、どしたの??」

「いや、その……一応付き合ってるんだけどさ、もう別れようかなって……」

私の言葉に、ジュンちゃんは「ふうん」と簡素な返事を返した。興味がない……のかな？

「ま、別に別れたいなら別れりゃいいと思うけど」

クールな反応に、私は思わずたじろぐ。

「や・・・だつてさ、酷いんだよ？あたし、彼の家族ごと養つてた時期もあるのに、彼全然働かなかつたし。だから嫌になつて彼の実家出たんだけど・・・」

私はジュンちゃんに、彼氏と別れようとしている理由を説明して聞かせた。

もう五年も付き合つてて、結婚届けまで書いた事があるのに、両親への挨拶には行こうとしない事。油断しているとすぐ働かなくなつて私の稼ぎをあてにになってしまう事。

一時期彼の实家で同居してた時も、彼の家族の分も生活費を出していたのは私だけで、彼は働いてすらいなかつた事。おまけに私の貯金を使いこんだり、私に借金させたりと、ろくな事をしてない事。あげたらキリがないくらい、この先続けていく事に希望が持てない要素しかないのだ。

「じゃあさっさと別れれば良かったじゃん」

「別れようと思ったよ。思ったけど！好きだから、いつかは・・・で、思つちやつたんだもん！！」

それで別れるタイミングを逸した。というか、別れては復縁を迫られて了解してしまつていた。自分でも情けないとは思つけど、やっぱりこれが、惚れた弱みというやつなんだと思う。

「ああもう！！じゃあカナさん、結局どうしたいのさ！？」

苛立ち始めたジュンちゃんに、私は思わず泣きそうになる。

「別れるよ！！別れるもん！！あと一カ月待って迎えに来なかったら！！」

「結局待つのかよ！！来ないって！！ソレ絶対来ないから！！」

断言するジュンちゃんに、思わず声を荒げた。

「来るもん！！絶対来るもん！！！！」

言ってから気付いた。

何だかんだ言いつつ、結局私、待ってたいんだ……。

「あ、そ。じゃあ待てばいいんじゃないね？」

気まずい沈黙が流れる。

あ……、まずったなあ。

「ジュンちゃん……あの……」

躊躇いながら声をかけると、ふう〜と溜め息が返って来た。

「……カナさん、悪い。この話、ここでやめよ。これ以上話しても仕方ないしさ」

「あ、うん……」

気まずさでうつむいた私に、ジュンちゃんが優しく言った。

「ごめんねカナさん。カナさんの問題なのにとやかく言つて。もう俺、さっきの事については何も言わないからさ、今日はもうパーッと遊んで楽しくやろうよ。ね!」

「ありがと……。ごめんねジュンちゃん」

思わず謝ると、ジュンちゃんは笑つて言った。

「謝らないですよ。カナさんが悪い訳じゃないデシヨ。もういいからさ、気にしないで!言ったデシヨ、この話はもう終わり!!ハイ、切り替えようね〜」

有無を言わせないその口調に私は思わず頷き、気まずい空気は一気にいつもの明るい空気に戻った。

「ところでさ、どこ行こうか?どこか行きたいところある?」

「ん〜、カラオケとか?」

「お!いいねえ。俺いっぱい歌っちゃおうよ〜」

それから私達は二人カラオケに繰り出し、目一杯歌いまくった。

いつもは弟の正志と三人なのに、ジュンちゃんと私の二人きり……。

それがちょっとだけ新鮮で、なんだかちょっとドキドキした。

今になって思う。

多分この時が、全ての“始まり”だったんだ。

鈍いあたしがそれに気づくのは、それからずっと後の事だった。

第五話「愛って何さ？年下男子は無関心！？の巻」（後書き）

<次回予告>

「片思いつてヤだよねえ」

「何カナさん、好きな人でもいんの？」

「キャツ！！じゅじゅ、ジユンちゃん！！??？」

「いけ！あたつて碎けるだよ！カナさん！！」

「碎けちゃダメでしょ！！」

次回【フレンド】

第六話「片恋決定！？年下男子は絶対圏外！？の巻」

お楽しみに

第六話「片恋決定！？年下男子は絶対圏外！？の巻」

ジュンちゃんとのデート（？）から数週間が過ぎた。

その後私は無事就職先も決まり、仕事に家事にと忙しい毎日を過ごしていた。

そんな中で、相変わらずジュンちゃんとはよく遊びに行っていた。勿論、二人きりじゃなくて弟の正志と三人でなだけど。

ジュンちゃんと一緒に過ごす時間は本当に楽しくて、あつという間に過ぎて行く。

年齢のわりに周囲に凄く気を使える大人なジュンちゃんに、私はいつも感心していて、段々と彼を見る目が変わって来た。

一緒にいると楽しくて、近くにいるとドキドキする。

これって、もしかして……。そんな事を思い始めたある日の事だった。

「ねえジュンちゃん、あたしさ、やっぱり彼氏と別れる事にした」

ある時、何気なく電話で話していたジュンちゃんに何気なくそんな話を振ってみた。

『あ、そうなの？まあ、いいんじゃない？カナさんがそうしたいならそうすればいいと思うよ』

相変わらずドライな反応だ。

ジュンちゃんって、本当にこの手の話題にドライだなー。

「ま、そんな訳でさ、新しい恋がしたいなー、とか思ってるワケよ」

『ふーん。いいんじゃない？で、今は誰か気になる人とかいないの』

『？』

「一応そういうのは気にしてくれるんだ？ちょっと意外だ。ジユンちゃんの事だから、てっきり興味ないのかと思ってたけど。」

「んー、いることはいるけど……。向こうは全然圏外っていうか、気にされてないって感じなんだよね」

現状ではどう考えても？そういう対象に見られている気がしないのだ。

「へー、誰？同じ職場の人とか？」

「ん、えーと……。まあ、そんなとこ」

まさかそこまでつつこまれるとは思ってなくて、私は曖昧に言葉を濁した。

いや、だって、ねえ……。言えないよ、ホントの事は……。

『気になるならアタックしてみたら？メルアド交換したりとかさ』

普通に言われた。わかってたけど、ジユンちゃんて本当にこういう事に前向きだよな。

「いや、もう向こう、全然そういう気ないと思うし……。」

『何言ってるの！？んな事言っていないで、自分から積極的にいけば、案外仲良くなれるかもしれないよ？』

と言われても、ねえ……？

「や、無理無理！絶対無理だってば！！」

だって私が今気になってるのは……。

（ 君だよ、なんて言えるワケないっ！！ ）

ブンブン頭を振り、よぎった想いを振り払った。

今この状態で気持ちを打ち明けるとか、どう考えても無謀すぎるし！！

『なんでさー？普通に言えばいいじゃん。今度一緒に飲みに行きませんかー、とかさ』

ほらね。ジュンちゃんは私が他の男の人とどうなるうと全然気にならないんだもん。

カンツペキに圏外じゃん！！私！！！！

いつそ清々しいくらいの圏外っぷりに、ちょっと悲しくなりながら乾いた笑いを浮かべた。

「やー、うん、そーだねー。今度誘ってみよっかなー。あはは……」

『そうだよー。もしかしたら向こうも気になってたりするかもしれないしさー』

ナイナイ。だって今、全力で他の人ススメられてるし！！

内心つつこみつつ「そーだねー」なんて曖昧に頷いておいた。

ああ、自分がイタイ……。

『とにかくさ、まずは自分からガンガンいかなきゃだつて!!男つて案外自分からは誘えなかつたりするからさー』

あーハイ、そうだといいねー。

まさか今リアルにその人と話してますとは言えません。しくしくしくしく。あーもー誰かこの鈍い人何とかして下サイ!!ちよつとリアルに泣きそうになつて来た。

「まあうん、頑張ってみる……」

弱々しく言つと、『頑張つて!!!!!!』などと強く励まされてしまった。

いや、その励まし、余計にイタインですけど……。とか思いつつ電話を切つた私は、一人の部屋でふうふうと重々しい溜め息を吐いた。

前途多難だ!!多難すぎる!!!!!!

何この展開!!!!?自分でも驚きデスよ!!!!!!まさかこんなになつてたなんて……。

「あ~~~~、ど~~~~しよ~~~~……」

さっきの電話のやりとりで気付いた。

私もう、完璧にジュンちゃんのコト好きになつてる。けど、向こうはカンペキに私のコト、何とも思つてナイ。分かり切つてる片思い。望みはゼロ!!!!!!

もう切れた電話を見つめ、私は絶望的な気分でいっぱいになるのだつた。

第六話「片恋決定！？年下男子は絶対圏外！？の巻」(後書き)

<予告>

「ねえカナさん、俺の事嫌いななの？」

「え！？そ、そんな事……」

(この展開って、もしかして……)

次回【フレンド】

第七話「もしかして？年下男子と両思い！？の巻」

お楽しみに

第七話「もしかして？年下男子と両想い！？の巻」

自分がジュンちゃんを好きだと自覚して以来、私は何となく彼を避けるようになっていた。

何しろ彼は、絶望的なまでに私を恋愛対象外にしている。

ジュンちゃんが私を遊びに誘ってくれるのは、私個人に興味があるとかそういう事ではないのだ。

私が正志まさしの姉だから。それだけなのだ。

そう思うと無性に悲しくて、この頃では一緒に遊びに行こうと誘われても何か理由を付けては断るようになっていたんだけど……。

『仕事終わったら迎えに行くから、遊びに行こうよ！』

私の携帯電話にそんなメールが届いたのは、仕事が終わる一時間前の事だった。

（またか……。もう、やめて欲しいなあ、こっぴつ）

メールの相手はもちろんジュンちゃんである。

私はちょっとうんざりしながらこっぴつ携帯電話を手に席をたち、トイレに入ってメールを返信した。

『正志と二人で行ってあげればいいよー。私あんまりお金ないからさー。ごめんね』

とメールしたら、すぐさま返事が返って来た。

『カナさんの分は俺が出すからさ！たまには一緒に行こうよー！』

それを見た私は、思わずイラッとして短く文を打った。

『あたしの事は気にしないでいいから。二人で行って』

メールを送信してトイレを出ようとしたその時だった。

B u b b u b b u !

携帯電話が震え出し、見るとディスプレイにジュンちゃんの名前が表示されていた。

(ちよっ、メールじゃなくて電話!?何なのもう!!)

驚きながら急いで電話を切り、メールを打った。

『悪いけど仕事中は電話無理だから。メールにして』

送信し終わると、すぐにまた電話が震え出した。

ディスプレイに表示されているのは、やっぱりジュンちゃんの名前・
・。

(ああもうっ!何なの一体!?)

イライラしながら通話ボタンを押して電話に出た。

「ちよっとジュンちゃん!何なの?こっちは仕事中なんだよ?」

声をひそめながら苛立ちまぎれに言い放った私に、ジュンちゃんは怒り声を返して来た。

『だってメールじゃラチ明かないから！何？カナさん俺と行くの嫌なワケ？だったらハッキリ言つてよ！』

「そ、そんな事ないけど……」

戸惑う私に、ジュンちゃんはすっかり苛立った声で続けた。

『俺はカナさんを誘ってるんだよ！？ゆきっちゃんと二人で行きたいならわざわざカナさんに声かけないよ！』

ドキン！！

心臓が跳ねた。

今のセリフってつまり、ジュンちゃんは正志じゃなくて私を誘ってるってコトで……。

『とにかく迎えに行くから！待っててよね！！』

そのままブチツと電話が切れた。

(どっししよう……。この展開、一体どっしたらいいの!?)

ドキドキする胸を抑えながらももう切れた電話を見つめていると、トイレのドアが開き、人が入って来た。

「どっしたの？何かあった？」

心配そうに私の顔を覗き込んで来たのは、同じ事務員の伊藤さんだった。

3つ年上の彼女には、普段から色々話を聞いて貰っていて、ジュンちゃんへ片思いしている辛い話もよく聞いて貰っていた。

2人のお子さんがいる主婦で、仕事も出来る伊藤さんは公私共に頼りになる先輩だった。

彼女ならきつと、良いアドバイスをしてくれるに違いない!!

「い、伊藤さん!!き、聞いて下さい!!」

先程起こった信じられない展開を話して聞かせると、伊藤さんは何か妙に納得したように頷きながら言った。

「ん〜、やっぱりねえ。いつかそうなるんじゃないかと思ってたよ」

私が彼の誘いを断り続けている話を聞いていた伊藤さんは、いずれこういう展開になるコトを予想していたというのだ。

「え!?!何で!?!どういう事ですか!?!」

驚く私に、伊藤さんにはっこりと笑顔を浮かべた。

「だって、いくら友達のお姉さんだからって、断ってるのにそれだけ誘われるってコトはさ、何かしら気があると思っただ方が自然じゃない?」

「ええっ!?!でで、でもっ、彼は多分そういうんじゃないと思うんですけど……」

納得いかない私に、彼女はなおも笑顔で続けた。

「そんな事ないよ〜。今だって強引に誘われたんでしょ?それはもうカナちゃんの事好きってコトなんじゃないの?」

「そ、そうですね!? そうなのかな? でも、そんな事……」

ありえないと思いつつ、伊藤さんの言葉を聞いているとやっぱりジ
ユンちゃんはその事が好きなんじゃないかと思えて来る。

考えてみれば、たしかに友達のお姉さんを毎回遊びに誘う理由は見
当たらないような……。

「い、伊藤さん、わ、私、どうすれば……」

戸惑う私に、伊藤さんはニコッとひときわ爽やかな笑みを向けた。

「これはもう、告白しちゃうしかないんじゃない?」

「えええつつ!!??ここ、告白うつ!!??」

や、それはさすがに……と洩る私に、伊藤さんは「絶対大丈夫
!」と笑顔で太鼓判を押してくれた。

「向こうもカナちゃんから好きって言われるの待ってるんだと思う
よ?」

伊藤さんの言葉には妙な説得力があつて、最初は信じられない気持
ちだった私も、何だか本当にジュンちゃんが自分を好きなんじゃな
いかと思いはじめた。

とりあえず、今日彼が迎えに来て二人になれるんなら、その時に……

密かな決意を胸に、私は残り一時間を落ち着かない気持ちで過ごし
たのだった。

第七話「もしかして？年下男子と両想い！？の巻」(後書き)

<予告>

「あたしって魅力ないよね……」

「カナさんにはカナさんの魅力があるって!」

(キュン!!)

「ジユンちゃん……」

(これってやっぱり、そういうコト!?)

次回【フレンド】

第八話「デート再び!？年下男子と二人きり!の巻」

お楽しみに

第八話「デート再び!? 年下男子と二人きり! の巻」

仕事明け。私はロッカールームでそわそわしながら着替えをすませ外に出た。

(いた!!)

外に出てすぐの所にある駐車場に、ジュンちゃんの車が停まっているのを見て、私はさすがに胸のドキドキが止まらなかった。

(どうしよう! ホントに来ちゃったよ!!)

ああは言っていたものの、まさか本当に来るとは思っていなかった。しかも、車内にはジュンちゃん一人。正志の姿は見当たらない。

(ホントにあたしを誘ってたんだ……)

電話の時はもしかしたら正志も一緒に来るのかも、と思ってたんだけど、迎えに来たのはジュンちゃん一人だ。という事は、つまりこれは……。

(そついう、意味なのかな、やっぱり……)

『カナちゃんから好きって言われるの待ってるんだと思うよ?』

伊藤さんの言葉が頭をよぎり、鼓動が速くなった。

いや、まさか、そんな……。

安易に期待するのは良くない。もしかしたら単に正志の都合が悪かっただけかもしれないし。

そんな事を思いながら、私は深呼吸してなんとか心を落ち着け、勇気を出してジュンちゃんの車へと向かった。

「お疲れ」

ドアを開けるなり、ジュンちゃんは普通に声をかけて来た。

「あ、うん。お疲れ。ごめんね、待たせて」

「いや、別にそんな待つてないし、大丈夫だよ」

私が助手席に乗り込むと、ジュンちゃんはスツと車を発進させた。それなりに空間があるとはいえ、車内に二人きり……。

何だか気まずい私をよそに、ジュンちゃんは至って明るく、普通に話しかけて来た。

「とりあえずカラオケでいい？」

「あ、うん……」

曖昧に頷き、私は思考を巡らせた。

電話では怒った様子だったけど、今のジュンちゃんは至って普通に全然怒ってるようには見えない。

まあ、彼は元々、『喉元過ぎれば』というタイプで、物事を長く引きずらないタイプだから、あの時は怒ってたとしても、気にしないように振る舞ってくれているのかもしれない。

「あの、ジュンちゃん？」

思い切って声をかけてみた。

「ん、何？」

受け答えも至って普通だ。特にいつもと変わった様子は無い。

「あのさ、今日さ、正志は抜きで二人でってコトでいいのかな？」

するとジュンちゃんは、「え？」というような顔を浮かべた。

私は内心、あー、やっぱりね、と思いつつ気持ちを奮い立たせて言葉が続けた。

「あのさ、あたし、たまにはさ、家族なしで遊びに行きたいんだけど、ダメかな？」

言った！言ったよ！！

さて、ジュンちゃんはどう出るかな？

「そうなの？んー・・・、まあ、そういう時もあるよね。じゃあ今日は二人で行こっか」

(やった！！OKだよ！！やっぱりコレは脈ありってコトなんじゃない？)

私は内心思いつきり喜びながら表には出さないようにして普通に「ありがと」と短く述べた。

「でさ、ご飯はどつする？」

「んー、カラオケ屋で食べるんでいいんじゃない？」

などと普通に会話しながら車は市街地へと進んでいく。

「カナさん、これ知ってる？新曲なんだけど・・・」

車内に流れ出したBGMは、綺麗な女性ボーカルの声の切ないラブソングだった。

「んー、知らないけど、いい曲だね」

「このアーティスト、カナさんと同じ名前なんだよ」

「えー！そうなんだ？」

ごそごそと片手で車のセンターボックスを漁り、ジュンちゃんはCDのジャケットを取り出した。

そこに映っていたのは綺麗な茶色の巻き毛の若い女性だった。

「うわー、たしかに同じ名前だけど、スゴイ美人だね！私とは大違いだよー」

「いや、そんな事ないよー。たしかにこの子可愛いと思うけど、カナさんにはカナさんの魅力があるんだからさ」

自信持って、と眩しい笑顔を向けられた。

「あ、ありがと・・・」

思わず照れて目を逸らした。

そんな優しい笑顔を向けられると、やっぱりこう、何か、期待しちやうよ。

もしかしたら・・・。
そんな思いの中、私はジュンちゃんと二人、カラオケ屋へと向かったのだった。

まさかその先、あんなコトになるなんて・・・。
この時の私にはまだ、知る由もなかった。

第八話「デート再び！？年下男子と二人きり！の巻」(後書き)

<予告>

「あのねジュンちゃん、あたし……」

「ん？何？どしたのカナさん」

(言えっ！言うのよあたしっ！！！)

次回【フレンド】

第九話「アレアレ！？年下男子と大喧嘩？の巻」

お楽しみに

第九話「アレアレ!? 年下男子と大喧嘩? の巻」

初めは少し緊張したものの、二人でのカラオケは大いに盛り上がった。

「いやー、歌った歌った!」

帰りの車中で、ジュンちゃんは満足げに笑顔を浮かべた。

「楽しかったあ〜。ジュンちゃん、ありがとーね!」

満面の笑顔を向けると、ジュンちゃんはニッコリ笑って「どういたしまして」と言葉を返してくれた。

「カナさんが楽しめたなら誘って良かったよ〜」

ドキン!

向けられた爽やかな笑顔に胸が高鳴った。

どうしよう……。

言うなら今かな? でも、本当に言っても大丈夫なのかな?

言おうって心に決めてた筈なのに、いざとなると勇気が出ない。迷いながら、とりあえず口を開いた。

「……………あのさ、ジュンちゃん、その……………」

「ん?」

向けられた優しい目に、私はうるさいくらいの鼓動を感じながら言葉が続けた。

「あのね、実はあたし……その……、そう！相談があるの……！」

とっさに口をついて出たのは、そんな言葉だった。

「相談？何？俺で良かったら聞くんよ」

真面目さが含まれたその声音に、私はちょっとだけ引け目を感じながら彼を見た。

（違う！こんな事が言いたかったんじゃない……。ええい！もうこうなったら仕方ない！！）

私は腹をくくり、最初の計画とは別の切り口で話を進めてみる事にした。

「うん……。あの、ね、実は、気になってる人が……。いるんだけど……。」

するとジュンちゃんは、思いつきり爽やかな笑顔を浮かべて言った。

「そうなんだー。誰？この間言ってた職場の人？」

「えっと……。まあ、そんなとこ」

君です、とはやっぱり言えず、私は曖昧に言葉を濁した。

「そつかあ。あ、そういうえばカナさん、結局あの彼氏とはちゃんと別れたの？」

唐突に聞かれて、私はちょっと戸惑いながら答えた。

「う、うん。まあね。別れ話したのは電話でだけど、距離もあるし、もう会うコトも無いと思うよ」

私の言葉に、ジュンちゃんは満足そうに頷いた。

「なら問題ないじゃん。ガンガンアタックしちやいなよ〜」

「う、うん……。そうだね、アタック……」

曖昧に頷きながら、私は伊藤さんに言われた言葉を思い出していた。

『向こうもカナちゃんから好きって言われるの待ってるんだと思うよ?』

て、伊藤さんは言ってたけど……。

本当にそうなのかな？実は違う何てオチだったらどうしよう？

私の中にこのまま告白しちやえという気持ちと、このまま言わないでおいた方がいいという気持ちが激しくせめぎ合っていた。

「カナさん、自信無いか言ってるけど、俺はちゃんと魅力あると思うし、相手も好きって言われれば嬉しいんじゃないかと思うよ」

「でも、向こうはホントに何とも思って無いかもしれないし……」

ためらう私に、ジュンちゃんは力強く言った。

「大丈夫だって！もしダメでもさ、好きって言われてから意識する事だってあるんだから！ほら、男って単純だからさ！」

これは・・・遠まわしに早く告白しろと言われてるんだらうか？それとも本当に私が違う人を好きだと思ってアドバイスしてくれるんだらうか？

どっちなのか分からなくて、私はなおも戸惑いながら答えた。

「・・・でも、その・・・やっぱり私、自信無くて・・・」

「んもう！カナさん！何ウジウジしてんの！？考えてても始まらないって！とにかく行動しないとさ！！」

「で、でも・・・」

なおもためらっている私に、ジュンちゃんはイラツとしたように言い放った。

「あーもうっ！！いいよもうやめっ！！この話終わり！！これ以上話しててもしょうがないよ！！！」

そう言っつてスツと表情を変えた。

「ごめんねカナさん、カナさんの事なんだから俺がとやかく言う事無いよね。俺が悪かったよ」

無理に笑顔を作るジュンちゃんに、ふいに胸がズキンとした。何でそんなふうに笑うの？

頭をよぎるのは、伊藤さんの言葉。

『好きって言われるの待ってるんだと思うよ?』

ホントにそうなのかな?だからこんなふうに無理に笑ってくれるのかな?

考えても答えが出る訳も無く、かといって直接聞く勇氣も無く……。

その後私は、結局ジュンちゃんに何も聞けないまま、ただ他愛も無い世間話をして終わった。

ジュンちゃん、ごめんね……。

帰って来た自分の部屋で、私はさっきのやりとりを思い出して考え込んでいた。

もしホントにジュンちゃんが私を好きなら、私はジュンちゃんに酷いコトしちゃった。

誰だって好きな人に他の人の話をされたら良い気はしないだろう。

おまけに自分のを抑えて応援しようとしたのに相手が乗り気じゃなかったら、そりゃ怒るよね。

なのにあんなふうに無理して笑ってくれるなんて……。

「よし!決めた!」

明日、ちゃんと言おう。

ホントは誰を好きなのか、ちゃんと言うんだ!

今度こそ本当に告白する決意を固め、私はグッと拳を握り締めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271p/>

フレンド

2011年8月16日23時09分発行